

---

# カオス・クロニクル

岡村 としあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カオス・クロニクル

### 【NZコード】

N3140Z

### 【作者名】

岡村 としあき

### 【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあつた。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが出会い。

\* MMOの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

## 押し切れなかつたEnt er

一瞬の迷いが命取りになる。たつた一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善をつくす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体躯をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでオレの役目。

田の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアンントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が人一人入るのがやっとだつた。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロイネーちゃんがマリアベル。大男がパックン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パックンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パックンは笑う。シュレンのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリアベルが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリアベルの足元に六芒星の魔方陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となつて大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持つているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリアベルと同様の六芒星の魔方陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシユレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シユレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シユレンの掛け声で士気があがつた。パックンもマリアベルも、やる気をだきらせていく。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シユレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まつた。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ～、またよろ～～～」

「おつですー」

「おつかれ～～」

オレ以外のメンバーはそういう残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行つた。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たつたそれだけの事を、一瞬躊躇つた。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはあるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分が。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。BackSpaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれつきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもつと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になつた。

## 出合いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しそぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2・3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になつた事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかつた。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかつた。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になつて、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

つた。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。『苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”ビもつすー。今ヒマしてません？ よかつたら悪魔の森にでも行きませんか？？”

「”どうも。他のパーティに誘われちゃったんでまた今度お願ひします”

「"りよーかーい^\_^"」

『苦労な連中からたくさんのおいしー』。プレイヤー間同士で会話をするウイスパー モードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断つて、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で聞くべきじゃなかつたな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPボーションが切れていたので買出しにいくことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかつた。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまで道のりで、他のプレイヤーとすれ違つ事はなかつた。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずい。この当たりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、田的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によひやく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いや  
すいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んで  
おくようにしている。他にも何か切らしている物はあつたかな？  
とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こつた。

ラグの原因は田の前……それを見てオレは声をあげそうになつた。  
恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？ そ  
れらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようになつてい  
る。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろ？ それ  
とも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立つ  
た時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイ  
ヤーは戦闘不能になつたらしい。

いつたいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思つ。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。  
エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した人造人間ホムンクルスだ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごつこの果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまふが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごつこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あつてもなぐとも同じ0に等しい防御力と、一撃食らえれば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者が、よつぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの田の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらにはかけてやる。久しくお田にかかるといつエイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれないな。

しかし、30秒立つても、1分立つても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思つて、その場を離れかけたときだ。

「おんがいすますしゅ」

「はあ？」

意味の分からぬ、初めて耳にする……いや、初めて田にした言語だった。SMとか言つてるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだつたらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フニイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこにつの出会いで、ターニングポイントだった。

## フェイブナイト

「助かりましたあへへ」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゅっきゅっと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。…… punpun321という名前だ。なんだこりや？ プンプンむんにーいち？ マジでキレる3秒前とかいう意味か？

「punnun321ですへへへ プンって読んでくださいね」

ブンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使つたんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかつただなんて」

「ブンはネタ師じゃありませんよお～～～ 頑張つてレベルを上げていたのです！ そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄つてきちゃつて……」

「どうやら、無闇にMOBの群れに突つ込んだ拳銃、大量にリンクさせてしまつたらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！ 蘇生ありがとうございますへへへ」

ブンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。ブンのシリバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スクリを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

ブンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになつていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったブンが、さつきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去つてしまつてもよかつたのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こつても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶し<sup>うつとう</sup>い。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「ブンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくんへへ！」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイスクイルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとつてもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向かわせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どこのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかんせん数が少ない。敵のターゲットを集めると、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならロープを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまつ。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使用できるのだが……そこまでマゾな奴はそういうない。

こいつは、何でこんなマゾいのを選んだだろ？……ふとブンを見

ると、いつの間にかM.O.Bの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

チャットとキラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まつたブンはボコスカM.O.Bに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさっきのセリフが流れただが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそつ。

初心者に関わると口クな事がないのは、オレ自身がよく知つてゐるはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知つただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「パン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問い合わせる。

パンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、じゅらじゅら振り向いた。

「入ってるよーーーへへ  
これがブンの所属しているギルド『灰色の狼』

のギルドマントなのだvvv びつだ、マイッタか@@ミ

背中をひたひた回けて、プンはさつさつた。

その小さな背中にくつ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、ヒリアボス討伐を独占したり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人二ート共がほとんどだ。さつき組んだパックンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「ブン、それならギルメンに声掛けて育成手伝つてもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝つてもらつたほうがすぐに転職もできるだ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があつたわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、ブンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもつたいぶつてみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとCキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、ブンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われたへへへ、ギルメンなのに助けてくれないよーどりじょへ、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけとして、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くなってくれさいねー。とか言つてほつとかれる。周囲にすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……ブンは。

狩り場に行つても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできな  
いし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろ  
う。

かわいそうと言えればかわいそうだが……。ボランティアで友達につこなんてオレはほんめんだ。

「ねえ、エルくん?」

フンがオレに疑問形で何かを問い合わせる。解つている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出来る前に。

フンよつも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて! フンがんばって狩りつまくなるから^\_^」

オレの言葉よつも早く、フンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなつて、Enterを押されるのを今か今かと待つている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をフンに伝える。

## 『彼女に送るプレゼント』

「あらがとうございましたあ」

能天氣そうなセリフを背中に受け、村の道具屋から一歩外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはフレイバーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセットなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し込められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばつている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付け』といつるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の堀にそつて外に向かつ。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせていく。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフュイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わつたか？」

「うん、ヒルくんのおかげだよー ありがと'▽'」

ブンがオレに近寄つてきて、飛び跳ねる。子犬のよつな奴だ。

「レベルも15になつたから、違つ村に行けるね、やつたー^ ^」

「そつか、15になつたか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知つてゐる」

「ほんと@ @ お世話になります、歸丘ミロ（――）ミペコフ

ようやくナイトになつたブン（装備だけだが）を背中に、ハリの村を出る。

田描す先は、ミロンの村……近くミロブリン前線基地といつ、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこのつのレベルを上げる。

「ブン。ちよこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛け るぞ」

「ひやあ、助けて@@ー。」

前にすでに「パンは何匹かのウホアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で呪きのめし、静かにわせた。

「うわあ、ヒルくん強いー！」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル一のウホアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、一歳下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういうえば。

「電気あんま（？ー？）」

パンが頭を疑問符でいつぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの？ パンにもやつしてみて、ヒルくんへへ」

「ぐぐつてある。その上でやつてしまふといつなら、オレの奥義を見せてやる！」

「うわあーーーへへ」

パンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウホアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。  
そうなれば、用済みだ。

オレはプンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

一人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1・2倍。40未満は2倍になる。

わざと、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……。プンのような問題児を抱える気にはとてもなれない。

プンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合つて、あとは狩り友を作らせて勝手に40になつてくれればいい。オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、プンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。プンの奇行に振り回されるのも、プンのお世話係をするのも、今だけの……。

「つておこ、プンー、どこ行った！？」

気が付けば、パンの姿はビリにもなかつた。ゲームから落ちたか？

「ううだよおおお……」

ビリからうもなぐ、パンの泣きそつな声（本田6度田）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくパンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本田23回田）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃつた。てへ（^ - ^ \* ）」

何がてへ（^ - ^ \* ）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

パンのHPは川に落とした時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になつて、ミロノの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になつたばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

せつと40レベルになつてオレから卒業してくれ、パン……。

## 初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぽい取つてくるね、獲りたてはきっとおこしいよへりへじゅるり』などと言つて、犬搔きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになつていた。

リターんを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並ぶ、閑散とした風景に早変わりした。

「ヒルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよー お肉ばっかり食べてたらダメなんだゾー ふんふん♪♪

「お前はアホか」

プンがふんふん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩つたところで手に入るるのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよー プンだもん♪♪」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあつたな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いでて……一緒に泳いだことが縁で狩り友になつて……色々な所に行つてバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまつて、ザコMOBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴つたら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとつては……ヒマな時間を潰す、『ミニ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思つているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言つても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平氣な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達『』この果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。実際、ブンだつて

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

「フンなら、解るはずだ。」

「つて、またか！ ディ行つた、フン！」

「二二二おおおおお…」

「なんと、すぐ真横からフンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。」

「フンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生えってきた。」

「うわあああああーー？」

「壁にめり込んだじゃつた、もひお嫁にいけない、つ…ぐすん」

「移動不可状態になつて、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、フンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けたが、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。」

「村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。」

「テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突つ立つて立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。」

彼女の前に立つと、パンにゴブリン前線基地へのテレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で田の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

BGMも、それまでのどかだつた村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言つても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆つているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもかつて高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいっても、HPをナメてかかると痛い目に合ひ。IJKのMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思つたほうがいい。

数匹のゴブリンを引き連れて戻つてくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコMOBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フライグのパンでせんべいを呪むだけだ。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何  
も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてパンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ロープ装備のオレでも十分に耐えられる。

その隙にプリンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやつてている暇はない。明田は仄耀口。学校もあるし、0時には寝てねたい。

「行くぞブン。オレについて来い」

「あい！　＠＠ゝ　なんだかエルくん、頼もしい。もしかして、エルくんて弟さんが妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴょいぴょい付いてくるパンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、一つ下の泣き虫な弟が一人」

「やつぱりー！ ハルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^\_^」

「違つよ、オレは

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「ブンはね～。一人っ子なんだあ。いいな～兄弟へへ」

「そうか

「エルくんエルくん！　エルくんはどんなお仕事してるの？　ブンは高校生だよへへ」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのブンも、のほほんとして、天然なヤツかもしねりない。

「エルくんつて落ち着いてるよね～@@　もしかして、30代の大人才つたりする！？　キャラーー渋い！」

「誰が30代だ！？　オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！　あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなつて個人情報を一部だが開示してしまつた。にしても、なかなか失礼なヤツだな、ブンは。

「えーーー@@　同じ年なんだ～エルくんつてやつぱつす～いんだね。ブン、尊敬しちゃいます～～～」

「どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やつぱこいつ、苦手だ。ベースを崩されると、行動が読めない。」

「…………いいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワントランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になつてている所に、木でできたお粗末な小屋……その周囲には、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突つ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから20以上高い。

ゴブリンの群れに突つ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合つが、ダメージは一ヶタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、ブン！」

「あい！　@{@}」

ブンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の斬撃を繰り出すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであつてもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウオーリア並みである。

瞬く間にブンは全てを平らげる。思ったよりもブンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかかるないかもしない。

時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思つて移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃の音や、ダメージを食らつたときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そのプレイヤーとブンと一緒に狩らせよう。一人が狩り友になつてくれれば、ブンの育成をそいつに任せてしまえる。

「ブン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか?」

「欲しい——」

「なら、ちょっと行ってみよう」

ブンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂いていた。

「オーケだ。オーケウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おぐの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだらう。

かつこよくなれば、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールホールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はつきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「ブンもオークにすればよかつたのにな」

「えーー嫌だよ、かわいくないもん」

あのオークの大男がブンのよつなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなり。

「フェイブでよかつたな、ブン」

「@@"」

オークがその場にいた「ブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかつたらこの子と一緒に狩りをしませんか?」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ねを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシラボーンですぞ（・・・）」

「じつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておく」

「ねを。ほんじゅお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきました」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですよ。ぼくちんのメインキャラだつたラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……「ロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニコータイプに覚醒できないと思います」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、ロロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すこい理由があつたんだね@@-。むろび321だよ~」 プンつて読んでね^~^

プンがヤマモトの前に出て、へんつて踊つてを見せた。

「ぬお。フニイブツ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマモトおもしろいーこへへ ぬいじくねー。」

またひらりと舞ったパン。ヤマモトは無意識であっちこっちにいったりと、パンの周りをうろちろしていた。

「何やつてんの、ヤマモトっ。」

「どのアングルが、一番ベストかなって、由つていいよねえ。つぶふ。中尉もそう思わんかね？」

「へへ？」

パンはヤマモトの変態行為に付いていらないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態がー やつぱりお前はーーー あっちいへ、しつしー。」

「ぬお。変態とは失敬なー。僕は

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオーケーの固体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だー。」

## GMホールは慎重に

「変態と開き直ったヤマモト。むれ抜っこ、墨抜っこ、血抜っこ。そして、今もなおパンの背後を動き回つてゐる。『変態の鑑のような男だ。』

はつと黙つて後悔してゐる。ヘタをいじり、パン以上に厄介な存在かもしれない。

「やつぱここや。他を逃たぬでわざわざ」

「いのつ事は、やつと黙つてしまつた方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。」

「そんな！ ぼくちん、パンちゃんの為なら何でもやるよー。」

「やつだよ、エルくん。ヤマモトかわいやつだよーへへ」

パンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシヤルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座つて、『パンちゃんおパンツ鑑賞会 ハアハア』をビリビリと開催してゐる。

「ぬを。心優しき我が女神！ あれですか！？ あなたは死なないわ、私が守るもの。でござりまするか！？ ぼくちん、パンちゃんとシンクロ率100%オーバー！ パンちゃんに向ひて、ぼくちゃんのHントリー・プラグ強制射出！」

最後のはトネタじやないか。もつ我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいパン。GMコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。つてGMさんで伝えるんだ」

「はーいへへ」

その後に、『もちろん冗談だ』とパンにウイイスを送つておく。

「ねお、GMコール（。。。）」

GM……たぶん、ゲームマスターという意味だと思つ。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、GMにメッセージを送る。それがGMコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。パンだって、解つてゐはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を書いて付きまとつなり」

「エルくん、終わったよへへ」

「ん？ 何がだ？」

「GMコールへへ 田の前に変態さんがいますへへ 私襲われそうで怖いです；； 捕まえてください！ つてGMさんにメッセージ送つておいたの」

「……」

「ガクブル（（。 。 ））」

「ブン、やればできる子なんだよ。いえーいへへへ」

「お前はアホか！ 本当にやるなんて何考えてんだー。そもそも、冗談だつてウイス送つておいたろうがー！」

「えー————； あ、ほんとだあ、気付かなかつた。あは。（ ）○」

あは。（ ）○じやねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行つた。またか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してGMに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるつて……」

「え！ ヤマモトさん……！」眞福を祈ります（ ^人^ ）

祈るな。

しかし、また突然「つい縁の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふつかああああつー なんか回線の調子悪いみたいだつたけど、直つた！」

回線が切れ落ちただけだつたか……。

「おかえりヤマちゃんへへノ プンにつぱい心配しちやつたよお  
せつきまでい冥福を祈つていたお前はどういつた。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あつちで一緒に狩り。  
オレがMOB引いてくるから、ポンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なポンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日は  
だけは我慢してやる。今日は。

それからせつきまで、ポンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、  
ヤマモトを加えて再開する。

ポンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありつ  
たけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こいつ時は助  
かる。

オレがMOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。オレが  
MOBを引っ張る。ポンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ  
20分は繰り返した。

その成果で、ポンは瞬く間にレベルが22になり、ヤマモトも2  
5になつた。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。ポンと違い初心者ではない  
ので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使つ  
タイミングが絶妙だ。

「」のままレベルが上がつていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色々なパーティーから引っ張りだこになるだろ？。

……これさえなれば。

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「オレがガ ダムだ！……！」」

「「「うぬせ」」

ヤマモトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいふらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙 斬！』とか、『オレのこの手が光つてうなる』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言つていた。

何を言つてゐるのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦つてゐるときのパンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言つな、オタクが」

「エルくん、ハアハア～♪」

「パン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア～♪」

「ハアハア～！ あーも～、10分休憩！ オレ、飲み物取つてくる～。」

「こり～～～」

「あ、ぼくちん～～～でいいよー。ストロー付けといてね、あと、おこしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマモトアキラ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもつ寝てしまつたらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかつた。

時計を見ると、すでに一時を回つていた。もう少し狩をして、今日は終わる。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口呑む。

やはつ、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、『ほかない』よう『パソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。HPが0になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のようだ。離席しているのか、キャラが突っ立つたまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、1000を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けたMOBはない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切つて行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

PKだ。

PKとは、Player Killerの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……Player VS PlayerのPKとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というPKは、1年前からずっと活動を続いている有名なPKだ。

種族はダークエルフ。職業はローダーで、レベルは60代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した一振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタッフ』は高いHPを誇るオーラクでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面上に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はPKギルドのギルドマスターで、うかつにPKをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にPKとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

いや……落ち着け。確かに持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があつたはずだ。ブン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減つた経験値は取り戻せる。

とにかく今は…… プンとヤマモトを早くログアウトせむか、村に帰還してもうひしがない。

「ねこ、パン、ヤマモト、早くログインしない？」

しかし返事は無い。まだ席を離れたまらしい。どうある……？

ブンが能天氣にも今帰つてきたらしい。

「あれ?  
エルくん何してるの?」

「バカ！ パケられたんだよ、一回ログアウトしろ！ もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかつた^ ^』。そのブンのセリフが画面に表示されたのと同時に、短い悲鳴がして、ブンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまつ。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローグらしい殺し方だ。

「ヤマモト……このならすぐログアウトしろ。」

「ぬを。何でこれー?」

「P.Kだ。早くログアウトしろ。20分後にはまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れてこるはずだから」

「わかった。ぼくちんがP.Kしちゃる! プンちんをここんだけしかりん格好にしたP.Kは許せん! ハアハア」

「やめろって! 相手はレベル60代のダークエルフローグだぞ! 生き残っているのはお前だけなんだ! 神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して!」

しかし、ヤマモトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマモトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタッフ』が。

しかし、スキルは失敗してしまつたらしく、ヤマモトのHPは1

ミツも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一難ぎ。それも軽くかわされてしまつ。

斬魔が消える。ヒツヤヤマモトは背後に振り返りデュアルスタッフの一撃に備えようとする。しかし 斬魔が姿を現したのは、ヤマモトのアームの背後。

つまづり、もともとヤマモトのアームの正面に圧しつもりでいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛けた。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すらりとれない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくHPが減っていない。

……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見てみる。ヤマモトのHPが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐアームしようともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！ ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャシトではなく、ヒリアー帯に響き渡る、シャウトでアームを渡る。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。40近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「……オレがガダムだ！！！」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中した那一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアwww テラワロスwww

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそのままぐく。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめると言ったのに……。

斬魔はすぐここを去り、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さり、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ撒いて、周

囲を埋め刃べす。

「ハリは緑のゴリ箱。あーへつむ。ゴリはゴリ箱に捨てやう俺様  
ソコグリエ」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまつだらう。

せつかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こつらは平然と踏みにじつて、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリストートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなり。『本当のオレ』なり……こんなヤツ、簡単に……。

リストートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめるな」

ブンだつた。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのブンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻つたあと再びハリに……戻ってきたのか。

「www」

ブンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フュイブつてwww ちよおまwww」

斬魔は依然座つたままである、それでも攻撃が当たらない。だが、ブンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんwww しかも、灰色の狼つて。これは戦争やなwww」

斬魔はやれやれと言つた感じで、起き上ると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げるブン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かつても、どうしようもないんだ。だから、もうやめる。

そして、再び姿を現した斬魔。

ブンは背後を取られて。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の中年青年に。

フュイブナイト。フュイブナイトの青年である。

「@@?」

パンは何が起きたか理解できず、その場に立ちつくす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、  
ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かつて走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構  
える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回  
り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全  
体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタ  
ップを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにス  
キルが不発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「パン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト  
……フェイブナイトの魔王だ。そしてあれが、60レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……』

## 桺、舞う

ヴァンガード。確かに英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持つている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだらう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力2300 防御力 560なら、それが攻撃力560  
防御力 2300となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。桺はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はつきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であつたりする。

そのお陰か、1年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー1の地位にいる。

その柾が……田の前にいる。

何故ここにいるのか？ 理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るPKなのに對して、柾はPKを狩るPKKなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に對して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが柾に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、柾の前に現れる。柾はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

柾はナイトでありますながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは一人が戦っている間に、ブンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもううと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の柾に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。柾は不意打ちに備える。しかし、5秒経つても10秒経つても奴の姿は現れない。

「あ！ エルくん下見て！」

「ブンの言うとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があつた。  
……逃げたか。

「ブン、ちょっとあの人にお礼言つてくるねへへ」

ブンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した柵に駆け寄つた。

「助けてくださいありがとうございました」

早速、打ち間違えたらしい。

「いえ、別に。PKを潰すのが趣味なんですね」

柵は素つ氣無くそう答える。

「強いんですね、ビックリしちゃいました@(@@」

「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」

「カインさん（？）（？）」

「ああ、初心者の人ですか？ なら知らないのも当然ですかね。力インさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。俺も初心者だった頃、色々お世話になつたっけ」

「へえ、その人。今はどつしてるんですか？？」

「一年前くらいに……ちょっと事件があつてね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はやつしてこむのが…

…

桜は、背中を向け」の場を去つてゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り…頑張つて下さい。それでは」

次の瞬間、桜の姿はそこには無かつた。

「あの人、すつゝく強かつたね@ @@ プンもあんな風になりたいなあ～～～」

「ぬを。パンちゃんの好意がさつきのフュブ男に向かつている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしく、田の前で桜が仇を討つてくれたこともあるのだらう。……逃がしてしまつたが。

「あれね。そういえば、ヒルくんつて桜さんと知り合ひだつたの？桜さんの事、詳しかつたみたいだし@ @」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知つてゐる。桜はPKKとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。」

桜が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなつたんだな、桜。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

---

カオス・クロニクル

2011年12月17日22時54分発行